

# よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



2

よろこびの知らせ  
第2集

目 次

神の養い .....	1
列王記第一 17:8-16	
神の励まし .....	10
列王記第一 19:1-8	
神の霊 .....	19
列王記第二 2:6-11	
神の守り .....	28
列王記第二 6:15-19	

ここに収められたのは、2019年9月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は“Gospel Project”に沿って選ばれています。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

## 神の養い

### 列王記第一 17:8-16

17:8 すると、彼に次のような主のことばがあった。

17:9 「さあ、シドンのツアレファテに行き、そこに住め。見よ。わたしはそこの一人のやもめに命じて、あなたを養うようにしている。」

17:10 彼はツアレファテへ出て行った。その町の門に着くと、ちょうどそこに、薪を拾い集めている一人のやもめがいた。そこで、エリヤは彼女に声をかけて言った。「水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。」

17:11 彼女が取りに行こうとすると、エリヤは彼女を呼んで言った。「一口のパンも持って来てください。」

17:12 彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。私には焼いたパンはありません。ただ、かめの中に一握りの粉と、壺の中にほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本の薪を集め、帰って行って、私と息子のためにそれを調理し、それを食べて死のうとしてしているのです。」

17:13 エリヤは彼女に言った。「恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。その後で、あなたとあなたの子どものために作りなさい。

17:14 イスラエルの神、主が、こう言われるからです。『主が地の上に雨を降らせる日まで、そのかめの粉は尽きず、その壺の油はなくならない。』」

17:15 彼女は行って、エリヤのことばのとおりにした。彼女と彼、および彼女の家族も、長い間それを食べた。

17:16 エリヤを通して言われた主のことばのとおり、かめの粉は尽きず、壺の油はなくならなかった。

#### 一、預言者エリヤ

イスラエルの国はソロモンの死後南北に分かれ、北は「イスラエル」、南は「ユダ」と呼ばれるようになりました。南王国ユダはソロモンの子、レハブアムによって

治められました。北王国イスラエルはソロモンの家来であったヤロブアムが王となりました。神殿は南王国エルサレムにありましたので、ヤロブアムは、北王国の人々が南王国に行かないようにするため、北王国に自分たちの祭壇や礼拝所を造り、祭司を任命し、祭日を決めました（列王記第一 12:31-33）。それは、聖書に定められたものではなく、勝手に作ったものでした。それで、ヤロブアムからおよそ 70 年たってアハブが王になった時には、北王国の人々はまことの神への信仰から離れて行き、バアル崇拝が国中で盛んになっていました。アハブ王はシドンの王の娘イゼベルを妻に迎え、妻イゼベルとともにバアル崇拝やアシェラ崇拝を盛んにしたのです。イゼベルは 450 人のバアルの預言者と 400 人のアシェラの預言者を養っていました。

まことの神、主の預言者たちの多くは、アハブとイゼベルによって殺されましたが、主は、主の預言者を北王国イスラエルにも残しておいてくださいました。そのひとりがエリヤでした。預言者エリヤの名前が最初に出てくるのは、列王記第一 17:1 です。「ギルアデのティシュベの出のティシュベ人エリヤはアハブに言った」とあります。何の前触れもなく、突然、エリヤが登場しますが、エリヤは、すでにアハブやイゼベルに知られていましたから、それまでも預言者として活動していたのでしょう。しかし、北王国で預言者として活動することは命がけでした。エリヤがアハブやイゼベルに知られていたといっても、それは「お尋ね者」として知られていた

ので、エリヤがアハブの王宮に出向くことは危険きわまりないことでした。

しかし、預言者は主なる神のメッセンジャーですから、たとえそこがどんなに危険な場所でも行かなければなりませんし、伝えるべきメッセージが人々に気に入られないものであっても、主の言葉通りに語らなければなりません。エリヤはそのことを勇敢に、また、忠実に果たしました。神は、どんなに暗い時代でも、神の言葉を知らせる預言者を与えてくださっています。神の言葉は人を生かします。そして、神の言葉によって生かされた私たちは、他の人にそれを伝える小さな「預言者」となって、他の人々を励ますことができるようになるのです。

## 二、エリヤの預言

さて、エリヤの預言はこうです。「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。」（列王記第一 17:1）これは、バアルに従い、アシェラを拝む人々へのチャレンジでした。「バアル」という名には「主人」という意味があります。しかし、ほんとうに「主」と呼ばれるべきお方はまことの神だけです。かつては、まことの神、主を知っていた人々が、主を捨て、人間が作り出した神を礼拝し、それを「主人」と呼んで仕えていたのです。また、人々は、女神アシェラをあらゆる命あるものの母として崇めていました。しかし、あらゆるものに命を与えておられるお方はただひとり、イスラエルの神、生ける、まことの神、主です。

ですからエリヤは「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる」と言って、人々に、この生ける、まことの神を信じ、この神を礼拝し、この神に仕えるようにと呼びかけたのです。

エリヤは「二、三年の間は露も雨も降らない」と預言しました。そして、その言葉が語られた時から、ぴたりと雨が降らなくなりました。バアルは農耕の神で、バアルが雨を降らせ豊作をもたらしてくれると信じられていました。ところが、エリヤは、バアルが降らせるという雨が、ここ二、三年の間降らないと預言したのです。この預言は、地に恵みの雨を注ぎ、豊かな収穫で人を楽しませてくださるのは、バアルではなく、まことの神、主であることを示すためのものだったのです。

聖書は、エリヤが語った、生ける、まことの神を私たちに教えています。神は世界の創造者であり、あらゆるものに命を与えたお方です。人は被造物の中でも特別なものとして、「神のかたち」に造られました。神を知り、神と心と心を通いあわせることができる者として造られたのです。ですから、神は人に信仰を求め、人は神を信じることができるのです。神は自らを「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼び、神を信じる者たちと共にいて、その人生を導いてくださいました。イスラエルをエジプトから救われた神は、イエス・キリストによって、私たちを罪から救ってくださいました。神は御子イエスの「父」であり、同時に、御子イエスを信じる者の父となってくださるのです。英語で「神」と書

くとき、大文字で始まる “God” を使います。大文字で始まる言葉は人格を示しますので、これは、私たちが「神」という概念を信じているのではなく、「神」というお名前をもつ、ご人格を信じていることを表しています。

韓国語では神は「ハナニム」と呼ばれます。「唯一のお方」という意味があるそうですが、日本では神は「八百万（やおよろず）の神」と言われます。文字通りなら八百万のさまざまな神々が、あらゆるところにいるとされています。ですから、クリスチャンが「私は唯一の神、唯一の救い主を信じています」と言うのと、「それは、考えが狭い。自分の心が休まるのであれば、どの神を信じても良いのではないか」と反論されることがあるのです。しかし、「どの神を信じようが、それで自分の心が安らかであればそれで良い」というのは「宗教」の考え方であって「信仰」ではありません。宗教とは、人々の信仰心にに基づき、様々な歴史や文化と結びついて、それが人間や社会に役立つために作られた制度のことを言います。ですから宗教にとっては、そこから生まれる結果が同じなら、何を信じるかはさして問題ではないということになります。けれども「信仰」は違います。信仰は神と人との人格の関係、愛と信頼の関係ですから、どの神でも良いというわけにはいきません。私たちが皆さんにお勧めしているのは、「キリスト教」という宗教に加入することではなく、生けるまことの神と救い主イエス・キリストに信頼し、従うことなのです。日

毎の祈りの生活や週ごとの礼拝は私たちが神ご自身に近づくためにあるのです。私たちは礼拝をたんなる宗教の集まりで終わらせたくはありません。ここで、生ける神に出会う場にしたいと願っています。

### 三、神の養い

イスラエルの地方に旱魃が襲い、飢饉がやってきました。それで主はエリヤをケリテ川のほとりに導きました。エリヤはその川の水を飲んで渴きを癒やしました。また、朝と夕には、カラスがどこからかパンをくわえてきてはエリヤのいるところに置き、肉も運んできました。エリヤはカラスが運ぶパンと肉を食べて、飢えをしのぎました。神は、主を信じる者を不思議な仕方で守り、養ってくださるのです。多くの信仰者が、大変困っている時に、思いがけない方法で神の助けを頂いた体験を持っています。ある宣教師が本国からのサポートが届かなくて困っていたとき、思いがけない人からの援助があつて、必要が満たされました。そのときその宣教師は「エリヤのカラスが私を助けてくれました」と話していました。皆さんも同じような経験があると思います。

やがてケリテ川も枯れると、主は、エリヤをシドンのツアレファテという町に導きました。シドンと言えばイゼベルの故郷です。アハブとイゼベルの罪によって生じた旱魃と飢饉は、イスラエルだけでなく、イゼベルの故郷をも苦しめたのです。その町にひとりのやもめがいました。このやもめには小さな男の子がいましたが、食べ物が尽きてしまい、かめの中には一握りの粉、つぼには

少しの油しか残っていませんでした。それで、このやもめは最後に残った粉と油でパンを焼いて食べたなら、息子とふたりで死のうとしていたのです。エリヤはそのやもめに「主が地の上に雨を降らせる日までは、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくなる」と告げました。やもめはそれを信じて、まずエリヤのために、次に自分と息子のためにパンを焼きました。すると、空っぽになったはずのかめに粉がいっぱいになっており、つぼにも油がその口まで満たされているのです。それは再び雨が降るまで続きました。こうして、やもめと息子は救われ、エリヤはこのやもめが作ったものを食べ、養われたのです。この世界を無から造られた全能の神にとって、空っぽのかめに粉を満たし、つぼに油を満たすことはたやすいことでした。神はこの奇蹟によって、神には不可能なことはないことを表してくださいました。

聖書で「やもめ」や「みなしご」は社会的に最も弱い立場にある人々を指します。律法には「すべてのやもめ、またはみなしごを悩ませてはならない。」（出エジプト記 22:22）「在留異国人や、みなしごの権利を侵してはならない。やもめの着物を質に取ってはならない。…あなたが畑で穀物の刈り入れをして、束の一つを畑に置き忘れたときは、それを取りに戻ってはならない。それは、在留異国人や、みなしご、やもめのものとしなければならぬ」（申命記 24:17, 19）などと書かれています。律法というと、何か冷たい規則のように思われがちですが、律法は本来、神の愛の配慮の表れなのです。詩

篇には「みなしごの父、やもめのさばき人は聖なる住まいにおられる神」（詩篇 68:5）とあります。神は、その全能の力によって、また、その深い愛によって、外国のシドンのやもめを養い、そのやもめの手を通してエリヤを養ってくださったのです。

エリヤがカラスによって養われたことを思い巡らしていたとき、私は、主がヨブに言われた言葉を思い出しました。「鳥の子が神に向かって鳴き叫び、食物がなくてさまようとき、鳥にえさを備えるのはだれか。」（ヨブ 38:41）もちろん、それは神である主です。詩篇に「神は雲で天をおおい、地のために雨を備え、また、山々に草を生えさせ、獣に、また、鳴く鳥の子に食物を与える方」（詩篇 147:8-9）とあります。地に雨を降らせ、すべて命あるもの、空の鳥やカラスさえも養っておられるのは主です。主はカラスを養い、そのカラスを通してエリヤを養ったのです。

イエスは言われました。「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。」（マタイ 6:26）空の鳥を養ってくださる父なる神が、ご自分の子どもとした信仰者たちを養ってくださらないはずがありません。神への信仰は、決して、自分の利益のためにあるものではありませんが、神が神に頼る者に報いてくださることは確かなことです。主に信頼する者は、たとえ困難な状況に置かれる

ことがあったとしても、そこで行き詰まるような目に遭わせられることはありません。主は、信じる者を決してお見捨てにならず、必ず必要な助けを送ってくださいます。

きょうの箇所は、今から 2870 年も前の遠い昔の出来事ですが、エリヤが仕えた神は今も生きておられます。信仰の先輩たちは、困難に直面して心を乱して慌てたり、もう駄目だとあきらめたりしている人々に、「エリヤの神はどこにおられますか」と言って励ましていました。日々の生活の中で主に信頼し、「エリヤの神、主は、私と共におられます」と言うことができる者でありたいと思います。「私の仕えている神、主は生きておられる。」そう言って主に感謝し、主を賛美する者とさせていただきます。

### (祈り)

天地の造り主、全能の父なる神さま。あなたは生けるまことの神、ただひとり、私たちが信じ、愛し、従うことのできるお方です。きょうは、あなたを信じる者が、あなたによって守られ、養われることを学びました。この週も、御言葉に学んだことを生活の中で実践することができるよう、導き、助けてください。そして、あなたが、御言葉の通りに働いてくださったことを、次の週に分ち合うことができるようにしてください。あなたの御子イエスのお名前です。

## 神の励まし 列王記第一 19:1-8

19:1 アハブは、エリヤがしたすべての事と、預言者たちを剣で皆殺しにしたことを残らずイゼベルに告げた。

19:2 すると、イゼベルは使者をエリヤのところに遣わして言った。「もしも私が、あすの今ごろまでに、あなたのいのちをあの人たちのひとりのいのちのようにしなかったなら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。」

19:3 彼は恐れて立ち、自分のいのちを救うため立ち去った。ユダのベエル・シェバに来たとき、若い者をそこに残し、

19:4 自分は荒野へ一日の道のりをはいて行った。彼は、えにしだの木の陰にすわり、自分の死を願って言った。「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。私は先祖たちにまさっていませんから。」

19:5 彼がえにしだの木の下で横になって眠っていると、ひとりの御使いが彼にさわって、「起きて、食べなさい。」と言った。

19:6 彼は見た。すると、彼の頭のところに、焼け石で焼いたパン菓子一つと、水のはいたつぼがあった。彼はそれを食べ、そして飲んで、また横になった。

19:7 それから、主の使いがもう一度戻って来て、彼にさわって、「起きて、食べなさい。旅はまだ遠いのだから。」と言った。

19:8 そこで、彼は起きて、食べ、そして飲み、この食べ物に力を得て、四十日四十夜、歩いて神の山ホレブに着いた。

### 一、御言葉の力

列王記第一 17 章では、北王国イスラエルに雨が降らなくなることが書かれていました。年月が過ぎ、三年目に、主は再びエリアに言われました。「アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよう。」（列王記第一 18:1）イスラエルに雨が降らなくなったのは、エリヤがアハブ王に語った神の言葉によってでした。ですから、

再び雨が降るようになるためには、エリヤがもう一度アハブ王の前で神の言葉を語る必要があったのです。

神の言葉が雨を降らせなくもし、また雨を降らせもします。このことは私たちに神の言葉の力を教えてくれます。多くの人々は、神の言葉は人の心の中だけで働くのだと考えていますが、それは大きな誤解です。創世記にこうあります。「そのとき、神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた。」（創世記 1:3）「神は『天の下の水は一所に集まれ。かわいた所が現われよ。』と仰せられた。するとそのようになった。」（創世記 1:9）神は、その言葉によって、無から有を呼び出され、それを形造られました。そして神の言葉が、目に見える世界を、大宇宙から生物の遺伝子や原子の構成にいたるまでを支えているのです。イザヤ 55:10-11 にこう書かれています。「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」人が神の言葉を信じようが信じまいが、神の言葉は力をもって世界の中に働いているのです。

神の言葉は、目に見える自然界に働いているように、目に見えない霊的な世界にも働いています。神は、御言葉によってイエス・キリストを信じる者を救い、神の子どもとして生まれ変わらせてくださいます。ペテロ第一 1:23~25 はこう言っています。「あなたがたが新しく生

まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。『人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。』とあるからです。あなたがたに宣べ伝えられた福音のことばがこれです。」そして、神の子どもたちを養い、育てるのも神の言葉なのです。ペテロ第一 2:2 に「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです」とある通りです。

神の言葉が私たちを救うのはどのようにしてでしょうか。神の言葉が語られ、それが信仰をもって聞かれ、実行されることを通してです。自然や動物は神の言葉に従っているのに、神の言葉を最もよく理解できるはずの人間だけが神の言葉に逆らっています。そのため神の言葉が持つ力を体験できないでいるのです。神の言葉を信じて、それに従った人たちはみな、神の言葉が実現するのを見てきました。神は真実なお方です。求めるなら与えられる、信じるなら救われる、従うなら祝福されるという約束を守ってくださるのです。

## 二、御言葉の勝利

さて、エリヤは神の言葉を携えて再びアハブ王に会いました。アハブ王はエリヤを見ると「イスラエルを煩わしているのはおまえか」と言いました。エリヤはそれに対して、「私ではありません。それはあなたです。あなたは主の命令を捨て、バアル崇拜をしているではありません

せんか」と答えました。雨が降らなくなり、旱魃や飢饉が起こったのは、なるほど、エリヤの言葉によってでしたが、その災いを招いたのは、アハブ王とイスラエルの人々の罪でした。

そこでエリヤは、主が神なのか、それともバアルが神なのかをはっきりさせるため、バアルの預言者たちとの対決を申し出ました。アハブ王はそれを承知し、人々をカルメル山に集めました。そこに主のための祭壇と、バアルのための祭壇の二つを造り、それぞれに雄牛を一頭づつ、その祭壇に焼き尽くすささげものとしてささげることになりました。ただし、自分たちの手で薪に火をつけるのではなく、祭壇に天から火をつけた神がまことの神であるということにしました。

最初にバアルのための祭壇に犠牲が捧げられました。バアルの預言者四百五十人とアシェラの預言者四百人は朝から真昼まで「バアルよ。私たちに答えてください」と叫びました。しかし答はありませんでした。昼を過ぎると、バアルの預言者たちは、自分たちの身体を傷つけ、わざと血を流して興奮し、大声をあげて祭壇の回りを踊り歩きました。しかし、祭壇には何の変化もありませんでした。

次にエリヤが主のための祭壇を築き、そのまわりに溝を掘りました。祭壇に薪を並べ、犠牲の動物を薪の上に載せました。そこに四つの大きなかめいっぱいの水をいけにえや薪に注ぎかけました。それを三回くりかえしたので、水が祭壇から流れ落ち、溝を満たしました。そしてエリヤはこう祈りました。「アブラハム、イサク、イ

スラエルの神、主よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなただのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行なったということが、きょう、明らかになりますように。私に答えてください。主よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようになしてください。」（列王記第一 18:36-37）神はその祈りに答え、天からの火で、水浸しになっている薪もささげものも焼き尽くされました。その火は祭壇の石やちりさえ焼き、溝にたまっていた水をすべて乾かしました。これを見た人々は、「主こそ神です。主こそ神です」と言って、まことの神を礼拝しました。

人々がカルメル山を去った後も、エリヤはひとり残って祈りました。すると、雨が降り出し、やがて大雨となりました。主が「雨は降らない」と言われると雨は止み、主が「雨が降る」と言われると雨が降ったのです。神の言葉には天から火を下し、雨を降らせる力があるのです。エリヤはたったひとりで千人近いバアルとアシェラの預言者と対決し、勝利しましたが、エリヤの勝利は神の言葉の勝利でした。私たちも、様々な困難や問題に取り囲まれたとしても、真実な神の言葉を確信して、困難や問題に立ち向かうなら、神の言葉の力によって、そうしたものに勝利していくことができるのです。

### 三、御言葉の励まし

エリヤは神の言葉によって大きな勝利を収めました。ところが、列王記第一 19 章を見ると、エリヤは王妃イゼベルを恐れ身を隠しています。アハブ王さえ恐れなかつ

たエリヤがイゼベルを恐れたのはどうしたことでしょうか。アハブ王は合意の上で行ったカルメル山の対決で負けたのですから、エリヤの命を保証せざるを得ませんでした。そうしなければ人々の信頼を失い王として国を治めることができません。しかし、イゼベルにはそんな気持ちはありません。自分が養っていたバアルやアシエラの預言者を殺されたという恨みから、政治のことなど考えないで、すぐさまエリヤを殺そうとしたのです。

そこでエリヤは北王国イスラエルを離れ、南王国ユダのベエル・シェバというところまで逃げて来ました。ベエル・シェバはシナイ半島の付け根にあたるところで、そこから南は荒野が広がっています。ここまで来ればイゼベルといえども手を伸ばすことはできないでしょう。しかし、預言者が自分の持ち場を離れてしまったら、それは預言者としての務めを放棄したことになります。エリヤはそれを恥じて、「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください」（列王記第一 19:4）と祈ったのです。しかし、主は、「私のいのちを取ってください」というエリヤの願いを受け入れませんでした。エリヤに食べ物を与え、彼をシナイ半島の先端のホレブ山まで導きました。そこは主がモーセに律法を授けた場所でした。主は、エリヤをこの歴史的な場所に導き、かつてモーセにご自分を現されたように、エリヤにもご自身を現わし、御言葉を与えようとされたのです。

エリヤはホレブ山に着くとほら穴に入って一夜を過ごしました。すると主がエリヤに呼びかけました。「エリヤよ。ここで何をしているのか。」エリヤはそれに答え

て言いました。「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」エリヤは主の前でも泣き言を繰り返しています。エリヤは「主の預言者は私ひとりになってしまいました」と言いましたが、じつは、主は、イスラエルに七千人の主を信じる人々を残しておかれ（列王記第一 19:18）、エリシャをエリヤの後継者となるように備えておられたのです。エリヤはあまりの失望、落胆のためマイナスの面しか見えなかったのです。それは、私たちも同じだと思います。私たちも困難や問題にふりまわされる時、主が備えておられるプラスの面が見えなくなり、失望や落胆のほら穴に閉じこもってしまうことがあります。しかし、「外に出て、山の上で主の前に立て」という声を聞いたエリヤが、そこから一步を踏み出したように、私たちも、失望や落胆のほら穴から、主の前に進み出たいと思います。

エリヤがほら穴の入り口に近づくと、激しい風が山々を裂き、岩々を砕きました。風のあとに地震が起こりました。そして地震のあとに火がありました。しかし、主は、風の中にも、地震の中にも、火の中にもおられません。大風、地震、火。これは主の大きな力を表します。けれども、人は激しい風や地震、また火の中に立つことはできません。主が、ご自分の力をそのまま表されたなら、誰一人主の前に立つことはできないのです。それで、主は火のあとに「静かな声」でエリヤに語りか

けました。主はその「静かな声」の中に、ご自分を現され、エリヤは主の「静かな声」の中で、主にお会いしたのです。

このことは、今日の私たちにとっても同じだと思います。奇蹟的な出来事や神の大きな御業は、私たちの信仰の目を覚まさせ、「主は生きておられる」と感じさせてくれます。それは必要なことです。しかし、それがセンセーショナルな出来事だけで終わってしまうなら、その興奮が去ってしまった後、何も変わっていない自分を発見してがっかりすることでしょう。主は、ご自分の力を目に見える形で表してくださいますが、主が私たちと共にいてくださること、つまり「臨在」は、いつでも、

「静かな声」によって示してくださるのです。詩篇 46:10 に「静まって、わたしこそ神であることを知れ」("Be still, and know that I am God.") とある通りです。主の静かな声を聞くため心を静める時、私たちは主が私たちと共におられることを知ります。そこで聞く神の言葉によって、慰めと励まし、また力を受け、主によって造りかえられていくのです。

主はエリヤに言われました。「ハザエルに油をそそいでアラムの王とし、エフーに油をそそいでイスラエルの王とし、エリシャに油を注いで、あなたに代わる預言者とせよ。」(15、16 節) 主はエリヤに次の世代の王たちを立て、彼の後継者となる預言者を育てるように命じました。主は、イスラエルのために新しいことをすでに始めておられたのです。エリヤは「私のいのちを取ってください」と言いましたが、主は「あなたにはまだしなけ

ればならない使命がある」と言って、エリヤになお生きて、働くことを命じられたのです。ホレブの山で主の声を聞いたエリヤは、もう、今までのエリヤではありませんでした。心身ともに癒やされ、力づけられ、もういちどイスラエルに遣わされて、主の預言者としての働きを続けました。

私たちもまた、さまざまな困難や問題に取り囲まれて、身も心も疲れ果ててしまうことがあります。そのような時、私たちを慰め、癒してくれるものは、神の言葉の他ありません。世界を創造し、それを支えている神の言葉が、私たちを励まし、力づけられないわけがありません。私たちも、エリヤと同じように、神の言葉によって力を受け、自分の持ち場へと送り出されていきたいと思います。

きょうは、詩篇 119:47～50 の言葉で祈りましょう。

### (祈り)

主なる神さま。私は、あなたの仰せを喜びとします。それは私の愛するものです。私は私の愛するあなたの仰せに手を差し伸べ、あなたのおきてに思いを潜めましょう。どうか、あなたの上もべへのみことばを思い出してください。あなたは私がそれを待ち望むようになさいました。これこそ悩みのときの私の慰め。まことに、みことばは私を生かします。主イエスの御名で祈ります。アーメン。

## 神の霊

### 列王記第二 2:6-11

2:6 エリヤは彼に、「ここにどまっていなさい。主が私をヨルダンへ遣わされたから。」と言った。しかし、彼は言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません。」こうして、ふたりは進んで行った。

2:7 預言者のともがらのうち五十人が行って、遠く離れて立っていた。ふたりがヨルダン川のほとりに立ったとき、

2:8 エリヤは自分の外套を取り、それを丸めて水を打った。すると、水は両側に分かれた。それでふたりはかわいた土の上を渡った。

2:9 渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「私はあなたのために何をしようか。私があるところから取り去られる前に、求めなさい。」すると、エリシャは、「では、あなたの霊の、二つの分け前が私のものになりますように。」と言った。

2:10 エリヤは言った。「あなたはむずかしい注文をする。しかし、もし、私があるところから取り去られるとき、あなたが私を見ることができれば、そのことがあなたにかなえられよう。できないなら、そうはならない。」

2:11 こうして、彼らがなお進みながら話していると、なんと、一台の火の戦車と火の馬とが現われ、このふたりの間を分け隔て、エリヤは、たつまきに乗って天へ上って行った。

#### 一、天に昇ったエリヤ

列王記第一は、イスラエルの王、アハブの死で終わっていました。列王記第二は、アハブの子、アハズヤの病気のことから始まっています。アハズヤは病気のため、王になってたった2年で亡くなりました。アハズヤには男の子がいなかったので、アハズヤの兄弟、ヨラムが王となりました。

ヨラムが王となって間もなく、エリヤが世を去る時がやってきました。列王記第二 2:1 に「主がエリヤをたつまきに乗せて天に上げられるとき…」とあるように、エリ

ヤは普通の仕方では世を去るのではなく、「たつまきに  
乗って天にあげられ」ました。もちろん、それはたつま  
きに巻き込まれて死ぬということではありません。エリ  
ヤが天に上げられる時、超自然の「火の戦車と火の馬」  
が現れていますので、この「たつまき」も、単なる気象  
現象ではなく、超自然のものだったと思われます。エリ  
ヤは「火の戦車と火の馬」に乗り、たつまきのようにし  
て天に昇っていったのでしょう。普通、人は死んでその  
からだは土に葬られます。天に昇るのではなく、地に下  
るのです。しかし、エリヤは生きたまま天に昇りました。  
これは、主の特別なとりはからいで、聖書の人物では、  
他にエノクだけしか体験していません。

エノクはアダムから七代目の人で創世記5章のアダムの  
系図の中に出てきます。アダムの系図にはこう書かれて  
います。「アダムは全部で九百三十年生きた。こうして  
彼は死んだ。」（5節）「セツの一生は九百十二年であつ  
た。こうして彼は死んだ。」（8節）「エノシュの一生は  
九百五年であつた。こうして彼は死んだ。」（11節）

「ケナンの一生は九百十年であつた。こうして彼は死ん  
だ。」（14節）マハラルエルの一生は八百九十五年で  
あつた。こうして彼は死んだ。」（17節）エレデの一生  
は九百六十二年であつた。こうして彼は死んだ。」（20  
節）古代の人々、とくにノアの洪水以前の人々は、驚く  
ほど長寿で、何百年と生きています。しかし、どんなに  
長生きしても「こうして彼は死んだ」という言葉で生涯  
が終わっています。アダムが罪を犯し、その結果世界に  
死が入ってきました。だれひとり、この死から逃れるこ  
とができないという厳粛な事実が描かれています。

ところがエノクについてだけは、こう書かれています。「エノクは六十五年生きて、メトシェラを生んだ。エノクはメトシェラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。そして、息子、娘たちを生んだ。エノクの一生は三百六十五年であった。エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」(21～24節) エノクもまた世を去りました。しかし、「死んだ」とは言われないで、「神が彼を取られたので、彼はいなくなった」と言われています。ヘブル11:5には「信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました」と書かれています。「エノクは神とともに歩んだ」とありますが、その生涯は敬虔な生涯で、エノクは神と共に歩み、そのまま神のところに引き上げられたのだと思います。

旧約時代には人は死んでよみに下っていくということ以上のことは知らされてはいませんでした。しかし、新約時代には、私たちの人生が死で終わるのではないことが、イエス・キリストのよみがえりによって明らかになりました。イエス・キリストが復活し、天に昇っていかれたように、イエス・キリストを信じる者も、キリストの復活の命、つまり、永遠の命を受けて、地上の命を終えた後も、その命によって、天で生き続けるのです。そして、キリストが再び来られる日に、キリストが復活されたように、私たちのからだも復活します。キリストを信じる者は死に閉じ込められることはないのです。キリストを信じる者も、生涯の終わりに死を体験します。しかし、それは、キリストを信じる者にとっては、この世

界から次の世界へと進んでいく通過点にすぎないものになるので。

ある牧師が、死に対する不安を持っている人を励ますために、その人を訪ね、こう話しました。「地上の生涯を終えて、キリストのもとに行くのは、キリストを信じる者にとっては、ドアを開けて、次の部屋に行くのと同じようなものなのです。」すると、来客の邪魔にならないようにと別の部屋に入れてあった犬が、どのようにしてか、その部屋のロックを外し、ドアを開けて、その人の膝のうえに飛び込んできました。その人は「急に犬が飛び込んできて、話を妨げてしまってすみません」と言って牧師に詫びしましたが、牧師はこう言いました。「あなたの犬はドアを開けたら、主人であるあなたがいるのを知っていたんですね。そのように、キリストを信じる者も、死というドアの向こうに、信じる者の主であるイエス・キリストが待っておられることを知っているのです。」その話を聞きいた人は、何の不安もなく主人の膝に飛び込んできた犬を見て、主のふところに飛び込んでいこうという決心ができ、平安を取り戻したそうです。

若い人は、「死」や「死後のこと」などをほとんど考えないかもしれません。しかし、自分の人生を考える時、それが何の希望も、保証もない死で終わってしまうのであれば、人は死ぬために勉強したり、働いたりしていることになります。自分の人生が、そんな無意味なもので良いという人は誰もいないでしょう。若い日のうちに、真剣に人生を考えましょう。聖書は、イエス・キリストを信じ、神に従うなら、永遠に備え、意義ある人生を送

ることができるかと約束しています。多くの人が目に見える一時的なものを求めている中で、目に見えない価値あるものを求めて生きるのは簡単なことではありません。けれども、永遠に備えて生きる生き方が、地上の生涯をも祝福で満たすのです。エノクのように神と共に歩むことによって、エリヤのように自分に与えられた使命を果たすことによって、また、日々に神を恐れる生き方に励むことによって、永遠に備えることができ、それが同時に地上の生活の祝福となるのです。

## 二、霊の賜物を求めたエリシャ

さて、エリヤはギルガルを出発してベテルへ、またベテルからエリコへ向かいました。そうした町々に預言者の共同体があり、エリヤはその指導者として、世を去る前に彼らと会い、最後の指導を与えようとしたのです。エリシャは、ベテルにも、エリコにも、エリヤについて行きました。エリシャにも、エリヤが世を去る時が来たことが知らされていたからです。

エリヤはエリコからヨルダン川に向いました。エリコの預言者たちは遠くから眺めているだけでしたが、エリシャはエリヤから離れず、エリヤがヨルダン川を渡ると、エリシャも一緒に渡りました。エリヤは、エリシャとふたりきりになってはじめて、エリシャに自分が取り去られることをはっきり語り、エリシャに何をしてほしいかと尋ねました。すると、エリシャは「あなたの霊の、二つの分け前が私のものになりますように」と言いました。

「あなたの霊の、二つの分け前」というのは、エリヤに与えられたものの二倍の霊的な力ということです。こ

れは、エリシャがエリヤに勝るものになりたいといった思いから出た求めではありません。おそらくは、エリシャは、エリヤに与えられたのと同じ霊的な力だけでは足りない。自分にはエリヤの二倍の霊的な力が必要だと感じだからだろうと思われます。私たちが霊的なものを求めるのは、自分の弱さを知るからです。自分には力があると思っている人は、そんなに熱心に主の助けを祈りません。しかし、自分の足りなさを知っている人は、何事をするにも主の助けが必要なことを知っていて、それを熱心に祈り求めます。そして、そういう人が能力ある人よりももっと力ある働きが出来、主に喜ばれることを行うことができるのです。

また、「二つの分け前」には、「長子が受ける分」という意味もあります。イスラエルでは、親の財産を子どもが継ぐ時、長子は、他の兄弟の二倍を継ぐことができました。それは、長子の特権であり、また長子の責任でもありました。親の財産を多く受けた長子は、他の兄弟が困ったときには、助けてあげなければならないからです。エリシャは、エリヤから、預言者の共同体全体の指導を引き継ぎます。そのためには他の預言者に与えられているものの二倍の霊的な力が必要だったのです。エリシャは自分に与えられた責任の重さを知っていました。それで、霊的な力の「二つの分け前」を求めたのです。

エリヤはエリシャに「あなたはむずかしい注文をする」（10節）言いました。霊的な力そのものは、人間が与えることのできるものではないからです。エリヤは、今までエリシャと一緒にいて、エリシャに指導者としての訓練のすべてを与えてきました。しかし、霊的な力そ

のものは、そうしたことで与えられるものではありません。サンデースクールでは、教師は子どもたちに聖書の知識を与え、また、信仰者としての良い手本を示します。しかし、信仰を持ち、それを告白するのは、子どもたちひとりひとりの決心にかかっています。親から子に信仰を伝える時もそうです。親は子どものために祈り、信仰的な感化を与えることができますが、キリストを受け入れ、キリストに従う最終的な決断は、子ども自身が行わなければならないのです。私たちたちは、誰かから福音を聞き、誰かに祈ってもらって信仰に導かれ、誰かから訓練を受けて成長してきたのです。霊的な事柄が伝えられるために人が用いられます。けれども、人にはできない部分もあります。神が、とりわけ、神の霊、聖霊が、直接、ひとりひとりに働きかけ、真理を認め、悔い改め、へりくだる心へと造り変えてくださらなければ、最終的には霊的なものが伝わらないのです。

エリシャには神からの賜物を受け取る信仰の備えがありました。エリシャは神の霊の満たしを受けたのです。エリシャが、エリヤを見送ったあと、もういちどヨルダン川を渡って帰ってきたとき、エリコの預言者たちは「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」（15節）のを見ることができました。この後、列王記第二9:10までにはエリシャが行った奇蹟が次々と書かれています。エリシャはエリコの町の水質を改善しました

（2:19～22）。ユダの王ヨシャパテのためにモアブへの勝利を預言しました（3:4～27）。家中のからっぽの器すべてに油を満たし、預言者の仲間の困窮を救いました

（4:1～7）。不妊の女性を癒し、その子を生きかえらせま

した（4:8～37）。毒草から毒を取り除きました（4:38～41）。わずかなパンで大勢の人を満腹させました（4:42～44）。アラムの將軍のらい病を癒しました（5章）。エリシャはエリヤが行ったよりも多くの奇蹟を行っています。神はエリシャの求めに答え、じつに「二倍の靈の分け前」を、与えてくださったのです。

聖書は教えます。「わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。」（詩篇2:8）この御言葉で「あなた」と言われているのは、主イエス・キリストです。私たちは毎週、さまざまな国のために祈っていますが、私は、そのたびに、そうした国々が主のものとなるように、それぞれの国に主を信じ、主に従う者が増えますようにと願っています。国々が主のものとなるのは、武力によってでも、経済力によってでもありません。聖霊の力で福音の宣教がなされることです。主は言われます。「わたしに求めよ。」ですから私たちも、「国々を主のものに」とするため、私たちも国々の宣教のため続けて祈りたいと思います。

主イエスは言われました。「求めなさい。そうすれば与えられます。」（マタイ7:7）ヤコブも言っています。「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。」（ヤコブ1:5）足らなさを嘆くのではなく、それが満たされるよう求めましょう。主は私たちの足りないことを決してお責めにはなりません。主を信頼して求めないことを、お叱りになるのです。

靈的な力、聖霊の賜物について聖書はこう言っています。「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。」（コリント第一 12:31）「あなたがたのばあいも同様です。あなたがたは御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会の徳を高めるために、それが豊かに与えられるよう、熱心に求めなさい。」（コリント第一 14:12）

信仰を守り、それを証ししていくためには、聖霊の力が必要です。自分たちの足りなさを覚える時、エリシャが求めた以上に靈的なものを求める必要を感じます。今の時代が暗ければ暗いほど、もっと明るい光が必要です。人々の愛が冷えているならば、もっと燃えるような聖霊の愛が必要です。信じられない、従いきれないと言って、中途半端なところに留まるのではなく、「主よ、信じる霊を与えてください。従う霊を与えてください」と祈り求める者となりましょう。

### （祈り）

私たちに聖霊を賜る主なる神さま。私たちは、あなたがくださろうとしている聖霊の賜物のことを忘れ、自分の足りなさや弱さを嘆くことがなんと多いことでしょう。靈的なこと、信仰のことにおいて、あなたに大胆に求めることができますように。より優れたものを熱心に求め、天に上げられるその日まで、聖霊の力によって歩むことができますように。主イエスの御名で祈ります。アーメン。

## 神の守り

### 列王記第二 6:15-19

6:15 神の人の召使が、朝早く起きて、外に出ると、なんと、馬と戦車の軍隊がその町を包囲していた。若い者がエリシャに、「ああ、ご主人さま。どうしたらよいのでしょうか。」と言った。

6:16 すると彼は、「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。」と言った。

6:17 そして、エリシャは祈って主に願った。「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」主がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。

6:18 アラムがエリシャに向かって下って来たとき、彼は主に祈って言った。「どうぞ、この民を打って、盲目にしてください。」そこで主はエリシャのこぼれごととおりに、彼らを打って、盲目にされた。

6:19 エリシャは彼らに言った。「こちらの道でもない。あちらの町でもない。私について来なさい。あなたがたの捜している人のところへ連れて行ってやろう。」こうして、彼らをサマリアへ連れて行った。

### 一、主は私たちを守る方（詩篇 121）

詩篇 121 は、主の守りをこのように歌っています。

私は山に向かって目を上げる。

私の助けは、どこから来るのだろうか。

私の助けは、天地を造られた主から来る。

主はあなたの足をよろけさせず、

あなたを守る方は、まどろむこともない。

見よ。イスラエルを守る方は、

まどろむこともなく、眠ることもない。

主は、あなたを守る方。

主は、あなたの右の手をおおう陰。

昼も、日が、あなたを打つことがなく、

夜も、月が、あなたを打つことはない。  
主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、  
あなたのいのちを守られる。  
主は、あなたを、行くにも帰るにも、  
今よりとこしえまでも守られる。

「主は、あなたを守る方。」（"The Lord is your keeper."）短いですが、とても力ある言葉です。いつの時代のどの国の人も、自然災害や病気、戦争などを恐れ、そうしたものから守られるよう願ってきました。幸い、身近なところに戦争はありませんが、自然災害や病気は科学や医学が進歩した現代でも常に人を恐れさせます。つい最近も日本では台風が大きな被害をもたらし、今もまだ停電や断水が続いているところがあると聞いています。また、詩篇には、人間関係の苦しみが数多く書かれていて、中傷や裏切りなどの苦しみを訴えているものがあります。人間関係の苦しみは、現代も変わりなく続いています。世の中が複雑になればなるほど、危険が増えます。たとえば ID を盗まれ一瞬にして銀行の預金が消えてなくなるなどといったことが起こるようになりました。現代は、人類の歴史の中で、一番危険な時代なのかもしれません。そんな時代に、私たちに必要なのは、主の守りであり、「私を守ってくださる主」なのです。

神から離れた北王国イスラエルではありましたが、神はイスラエルを外敵、とくにアラム（今日のシリア）から、エリシャの預言によって守ってくださいました。エリシャの時代のイスラエルの王はヨラムでした（列王記第二 3:1）。ヨラム王は、エリシャに一目置いていました

が、それは、エリシャの神、主を信じるということではなく、エリシャによってイスラエルが守られたためでした。ヨラムの母イゼベルは存命中で、彼女のもとでバル崇拝が盛んに行われていました。ヨラムは主の「守り」を喜びはしましたが、「守ってくださる主」に信頼することがなかったのです。

「守り」は、それを念じていればやってくるというものではありません。私たちを守ってくださる主によらなければ、それは実現しないのです。聖書は「主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい」（詩篇 127:1）と言い、「神はわれらの避け所」（詩篇 46:1）と言っています。「避け所」は英語で "refuge" と訳されていますが、避難所、シェルターという意味です。私はカリフォルニアからテキサスに引っ越すとき、荷物はコンテナで送り、家族と一緒にドライブしてきました。アリゾナを通り、ニューメキシコからテキサスに入ったとたん、レストエリアが立派なのに驚きました。テキサスが経済的に豊かな州であるだけでなく、それは竜巻などに出会ったときのシェルターを兼ねているからでした。聖書は、神ご自身が私たちの避難所、シェルターであり、災いの日には主のもとに逃げこむよう教えています。その時、私たちは、主が確かに私たちを守ってくださるお方であることが分かるようになるのです。

## 二、主の守りを見る（列王記第二 6:8-23）

きょうの箇所 15 節に「神の人の召使が、朝早く起きて、外に出ると、なんと、馬と戦車の軍隊がその町を包

囲っていた」とあります。この「馬と戦車の軍隊」はアラムの軍隊です。アラムの王はイスラエルの領土を削り取るため軍隊を送るのですが、どこに陣を張るかといった情報が、いつもイスラエル側につつぬけになっていて、アラム軍の出動は空振りに終わっていました。アラムの王は、最初内通者がいるのではないかと疑いましたが、やがて、それがエリシャの預言によることが分かってきました。それで、エリシャを捕まえるために軍隊を送ったのです。たったひとりの預言者を捕まえるのに、「馬と戦車と大軍と送った」（列王記第二 6:14）というのは大げさなことですが、アラムの王はそれほどにエリシャの預言の力を恐れていたのです。

エリシャのしもべは、自分たちを取り囲んでいる軍隊を見て、エリシャに「ああ、ご主人さま。どうしたらよいのでしょうか」（15節）と言いました。しかし、エリシャはしもべに言いました。「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。」（16節）「私たちとともにいる者」というのは、主の軍勢のことです。エリシャにはそれが見えていましたが、しもべには見えなかったのです。それでエリシャが「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください」（17節）と祈ると、しもべもまたアラム軍に勝る主の軍勢を見ることができました。

このように、信仰者は見える現実だけでなく、見えない現実を意識して生きています。主イエスは誘惑の山で、サタンを斥けた後、「御使いたちが近づいて来て仕

え」（マタイ 4:11）るのを見ておられます。ゲツセマネの園では、ペテロがイエスを捕まえようとした者に剣で切りかかった時「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとでも思うのですか」

（マタイ 26:52-53）と言われました。主イエスにとって天の軍団は常に「現実」のものでした。

パウロは、コリント第二 4:8-9 でこう言っています。「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。」パウロは、ここで、伝道に伴う苦しみや迫害のことを言っています。パウロの行くところにはどこでも苦しみや迫害が待っていました。主を信じていればどんな困難にも苦しみにも遭わないというわけではないのです。パウロは困難や苦しみを現実のものとして受けとめています。しかし、もうひとつの現実、神の守り、栄光、力をも見つめていました。ですから、「苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません」と言うことができたのです。そして、パウロはこう言います。「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこ

そ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」

「見えないものに目を留める」というのは、矛盾のように思われます。しかし、それは信仰によって可能となるのです。信仰とは、「望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるもの」（ヘブル 11:1）だからです。しかし、信仰者であれば、誰もが見えないものを見ることができないわけではありません。エリシャのしもべは最初、それを見ることができませんでした。けれども、祈りによって見えるようになりました。私たちも、目に見えるものに心がとらわれている間は、見えないものを見ることができません。祈りによって信仰を働かせる必要があります。私たちも、何事においても「目を開いて、見えるようにしてください」と祈りましょう。そうすれば、困難や苦しみという現実ばかりでなく、信じる者をそこから守り、救ってくださる「主の守り」という現実が見えるようになり、不安や恐れ、思い煩いから解放されるのです。

エリシャはしもべのためには「彼の目を開いて、見えるようにしてください」と祈りましたが、アラムの軍隊については「どうぞ、この民を打って、盲目にしてください」と祈りました。すると、アラムの軍隊は指揮官から兵卒に至るまで、みな目が見えなくなりました。そこでエリシャは彼らをヨラム王のところまで連れていき、「主よ。この者たちの目を開いて、見えるようにしてください」と祈ると、なんと、彼らは自分たちがイスラエ

ルの捕虜になっているのに気付きました。ヨラムは、捕虜を滅ぼそうとしましたが、エリシャはそれを許さず、逆に彼らをもてなしてアラムに返しました。彼らは預言者エリシャによって示された主の力を恐れて、イスラエルの国境を侵すことがなくなりました（列王記第二 6:23）。

### 三、主の守りを体験する（列王記第二 6:24-7:20）

主は、イスラエルにも、アラムにもひとりの犠牲も出さないでイスラエルを守ってくださいました。同じようなことが、続く箇所（列王記第二 6:24-7:20）にも書かれています。サマリヤに飢饉が起こった時、それに乗じてアラムの王ベン・ハダデがサマリヤを軍隊で包囲しました。その時、サマリヤの物価が急上昇し、「ろばの頭一つが銀八十シェケルで売られ、鳩の糞一カブの四分の一が銀五シェケルで売られる」（6:25）ようになりました。ろばの頭はふつうは食用には使いません。なのにそれが80シェケル（800ドル）もしたのです。「鳩の糞」というのはそういう名前の植物の実だと思われませんが、一カブの四分の一というのは、手のひらに乗るほどの分量でしかありません。それが5シェケル（50ドル）もするほど食べ物なくなったのです。この時、ヨラム王は侍従とともにエリシャのところに行きましたが、エリシャは王にこう預言しました。「主のことばを聞きなさい。主はこう仰せられる。『あすの今ごろ、サマリヤの門で、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られるようになる。』」（7:1）「一セア」は両

手で抱えて持つほどの分量で、一シェケル（10ドル）で小麦粉なら一セアが、大麦なら二セア買うことができるというのですから、普段より安い値段だったのでしょう。王の侍従はエリシャの言葉を聞いて、「たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか」と言いました。それでエリシャは、その侍従に言いました。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」

その日、「主がアラムの陣営に、戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎを聞かせ」（7:6）たので、アラム軍はイスラエルがヘテやエジプトの軍隊を雇って自分たちを襲おうとしていると思い、陣営と食糧をそのままにして、国に逃げ帰りました。サマリヤの人々は、アラム軍の包囲から救われたばかりでなく、敵が残っていた食糧によって飢えからも救われたのです。エリシャが言ったように、サマリヤの門で小麦粉や大麦が安く売られるようになりました。神のなさる事は、実に不思議です。私たちの信じる神は全能の神であり、ご自分の言葉に真実なお方です。

ところが、主の言葉を信じなかった侍従は、この食べ物を口にすることができませんでした。彼はサマリヤの門の管理をしていたのですが、大勢の人が食べ物を求めてそこに殺到したため、群衆に踏み殺されてしまいました。エリシャの預言は、悲しいことに、それを信じなかったこの人にも成就したのです。神の言葉は、人が信じようが信じまいが実現します。しかし、信じない者は

神の言葉がもたらす祝福を受け取ることができないのです。主は、私たちが、その祝福を、信じて受け取ることができるよう、私たちに信仰を求めておられるのです。

ある人の聖書の扉にこう書かれていました。「これを守れ。そうすればこれがあなたを守る。」「これ（聖書）を守る」とは、聖書が命じることを守り行うことですが、聖書が私たちに命じていることは何よりも、「主を信じること」です。主を信じること、主への信頼が私たちに主の守りを見せてくれます。それを確信させ、体験させてくれるのです。

### （祈り）

私たちを守ってくださる主よ。私たちはあなたの守りによって日々を平安のうちに過ごすことができます。平穏な日々は決してあたりまえのことではなく、あなたの愛と力によって支えられ与えられているものです。そのことを覚えて、もっとあなたに感謝をささげることができる私たちとしてください。また、苦しみの日には、さらにあなたに信頼し、祈りのうちに、あなたの守りを確信することができますように。主イエスのお名前です。

## 福音と日本文化 ② 一あとがきにかえて

秀吉は毛利方、備中高松城の主将清水宗治の抵抗に手を焼き、高松城が低湿地にあることに目をつけ、大規模な堤防を作り、川の水を城に向けて流し込みました。梅雨の時期でもあり、高松城は城内まで水浸しとなり、湖の中の孤島のようにになりました。

この水攻めの最中に本能寺の変が起きました。そこで秀吉は毛利との和睦を急ぎ、和睦の条件に宗治の切腹を求めました。宗治は自分ひとりの死によって毛利家の領土が保たれ、高松城にいる五千の兵と領民が救われるのならと、それを受け入れました。城にいた一同はそのことを聞いて泣きむせびました。それは、宗治の死によって自分たちが救われて良かったといった利己的なものではありませんでした。宗治の将として、また武士としての真実な思いに対する感動の涙でした。

私は、こうした歴史の物語を読むたびに、キリストが人々の救いのために命をささげられたことを思います。もちろん、宗治の死は、神の御子イエス・キリストの尊い死とはくらべものになりませんが、それでも、それはキリストの身代わりの死を理解させるのに役立つものであると思います。日本の文化にはキリストの福音の輝きを暗くしているものがありますが、同時に人々の目をキリストに向けさせるものもあります。すべての人の主である神は、まことの神を知らなかった文化の中にも、福音を理解する手がかりを与えてくださっていて、日本文化の中に育った私たちであっても、ユダヤ・キリスト教文化の中に育った人と変わらず福音を理解できると思います。

日本の文化に束縛され、キリストに目を閉ざすのでなく、日本文化の中にあるキリストの証しに目を留め、福音の素晴らしさをいっそう輝かせたいと願っています。



**Penguin Club**

[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)